

# イスラエル映画から見る 社会の混迷と変革の可能性

中村 富美子

昨年発表されたイスラエル映画『エピローグ』と『514号室』は、貧困化する社会とそこに生きる人間の痛みを描き、深い印象を残した。鋭い批判精神に貫かれた両作品と監督の声から、イスラエルの今を探る。

か

つて社会主義を夢見た老夫妻が、理想を葬ったイスラエルの現在に失望、失意と貧困の中で、最後の尊厳として自殺を選ぶ。「エピローグ」はその最後の一日を追うドラマだ。若き日に革命を夢見た夫はその愛読書を手放し、最後に妻にドレスを贈ろうと考える。しかし古書店でも相手にされない。そんな時代遅れの本を読む者はもうこの社会にはいないのだ。妻の方はいつもの薬を買い出すと出かけた薬局で、金が足りずに恥辱を味わう。それでも微かな希望の記しのように、若い店員は自分の金をそつとレジに入れ、薬を彼女に手渡した……。

前年から、「障がい者、子ども、高齢者の福祉をカットすればいい」と言っただけで、富をたらしめた。軍需産業、医薬品、ハイテク分野も好況で、イスラエルの昨年の経済成長率は三・三％にのぼる。「しかし巨大な軍事費で財政は逼迫し、内実はギリシアの一步手前だ」。国はそのツケを公共サービス

の民営化、教育や福祉の削減で解消しようとしてきた。「さつさと死ねるように」という麻生太郎財務相の野蛮な言説がいま国際問題化しているが、ネタニヤフ首相も財務相だった一〇年

の権利者として政府と交渉した。そういう代理交渉を許さない今回の若者の動きは、社会を根底から揺るがす新しい力だ」とマノール氏は期待している。しかし、「恐怖の広報官、ネタニヤフは耳を貸さない」。昨年も前年比二割増の一五〇億ドルを軍事に費やし、より劇的な増税と福祉の削減を盛り込む予算案が目論まれている。今月の総選挙後、マノール氏はメールで意見を寄せてくれた。「社会を変えなければ、ガザの状況も変えられない。しかし貧困の恐怖の中で、強い指導者を求める声が多い。彼らの選択が政治的にも経済的にも彼ら自身の利益に反することがわからないのだ。社会を変える教育が必要だ」。その教育の理想を、マ

## 民族虐殺を 生き残った高齢者が なぜいま、自殺するのか



アミール・マノール

18歳のころから社会主義運動に参加。その後、ジャーナリストとして日刊紙「マリブ」などで活躍。同時にテルアビブ大学でテレビ・映画を専攻し、短編映画を制作。初の長編となる『エピローグ』は、敬愛する祖父母へのオマージュでもある。



『エピローグ』

監督：アミール・マノール  
出演：ヨセフ・カーモン、リブカ・グールほか  
イスラエル/2012年/96分  
エルサレム映画祭、ヴェネチア映画祭出品  
「東京フィルメックス」最優秀作品賞受賞

週刊金曜日 2013.2.1 (929号)

ノール氏は前世紀初頭の社会主義のコーボラタイプ（協同組）に見る。はたして建国の思想、あるシオニズムは、内包する民地主義をこえ、その社会主義の夢を取り戻せるのか。

虐殺収容所を生きのびた高齢者が、自分たちが建設した国家で生きていけない現状は、いずれにせよ、イスラエルという国家の成り立ちを根本から問い直すにはいいだろう。

『514号室』は、息も詰まる密室劇だ。すべては軍警察の狭い尋問室で、展開する。それがイスラエル社会

のミクロコスモス（小宇宙）であることに、観客は次第に気づかされる。始まりは「些細な」事件だ。ある部隊が占領地でパレスチナ人を虐待したらしい――。兵役終了も近い女性兵士アナが、事件の解明にあたる。

倫理感に燃える青臭い下級兵士、それも女性ごときに、特殊部隊の英雄的指揮官を起訴できるはずがない。そう高を括り、沈黙の掟を守る男たちをふりきり、アナは突き進む。そして思いもよらない悲劇に至る。

人間としての倫理観、国への思い、愛に揺れる心と体、ヘブライ語のできない母の世話……。514号室の閉鎖空間で交わされる会話から、モザイク社会であるイスラエルが浮かび上がり、兵士としての、そこに生き



## シャロン・バルズィヴ

テルアビブ大学で映画を専攻。その後、映画・テレビ界で俳優として数多くの作品に出演する。脚本家、コピーライターとしても活動。監督としてのデビュー作となる『514号室』は、低予算ながら緊張感に満ちた劇的効果をあげ、批評家から絶賛された。



### 『514号室』

監督：シャロン・バルズィヴ  
出演：アシア・ナイフェルドほか  
イスラエル/2011年/90分  
ロッテルダム映画祭、トライベッカ映画祭出品

# 軍の尋問室から 見たくない現実が 見えてくる

一人の女性としての葛藤が巧みにあぶりだされていく。

直属の上司は、面倒なことになる前に適当な報告書を書いて終わりにしろとうながす出世主義者だ。軍に同化する彼にアナは歯向かうが、一方では彼と不倫関係にあり、尋問室はときに熱い愛を交わす密室に変わる。

占領地で横暴を働く指揮官は典型的なマッチョで、尋問するアナを「左翼のロシア女め」と罵り、罪を否認する。ソ連崩壊後に急増したロシア移民は、イスラエルではおおむね人種差別的な右翼層だが、ここでは逆にロシア出身のアナが公正の旗を掲げて指揮官を糾弾する。それが「愛国的」軍人の心を逆なでするのだ。もちろん「左翼」は裏切り者の同義語である。

その指揮官も最後には罪を認める。しかし「軍隊では暴力を教えられ、その通りに行動した私を、法は守らないのか」と叫び、自殺する。そして今度はアナが、尋問されることに。

それにしても、なぜ自殺なのか。バルズィヴ監督はイスラエルの被害者化のメタファーだと説明する。「加害者から被害者へと自らを転換し、責任を他者に転化するためだ」

パレスチナ問題も同じという。「互いに自立した国家を作り、認めあい、それぞれ自分の国家に責任をもてばいい。なぜそうせずに、イスラエルは自分たちを殺す方向に向かうのか」

これほど厳しく批判的に現実を見据える作品を、イスラエル人はどう受け止めたのだろうか。

批評家からは絶賛。一般の観客からは感情的な拒否。その反応に接し、バルズィヴ氏は自分のナイーブさを悟ったという。「テルアビブは自由な街で、政治的にも寛容だと思っていたが、人々は現実に向き合う準備ができていない。しかし映画の命は長い。いつか受け入れられるだろう。僕は社会を変えるためにこの作品を撮ったのだ」

たしかに小さな変化はある。本作が描くような、兵士による上官告訴も現実に何件か起きていた。それは中東全体の「アラブの春」に連動したものだ。「軍内部で起きていることはイスラエル社会のアレゴリー（比喩）だ。革命とは言えないが、人々が覚醒し自問し始めていることは確かだろう」。

マノール監督と同様に、バルズィヴ監督もまた、怒りの声を上げ始めた若者に希望を託している。そして期待とは異なる選挙結果に落胆しつつ、微かな希望の声を届けてくれた。

「期待したような左派への大きな転換はなかった。なぜ六〇万人ものデモがあった後で、右翼が勝つのか。クレイジーだ。それでも、ネタニヤフの勝利はマスコミの予想よりは小さなものだった。問題は、社会的公正を求め今の運動を、いかに政治的公正の問いへと結びつけるかだ。私たちの未来はそこにかかっている。戦争は、私たちに苦痛しかもたらさない」

写真提供／東京フィルムメックス  
なかもら ふみこ・ジャーナリスト